

荒木牧人作「豊かさの向こう側」

<前編>

高橋洋ナレーション おれの名前は高橋洋。一浪して猛勉強したかいあって、4月から念願の大学生となり、今はほとんど毎日、遊んで過ごしている。

洋 ねえ母さん、1万円ちょうだい。

母 何に使うのよ。

洋 新入生歓迎コンパだよ。絶対行かなきゃなんねえやつ。

母 まったくもう。無駄遣いしないでね。

洋 はいはい、ありがとうございます。

ナレーション おれはおふくろから1万円受け取り、いそいそと家を出ていった。その晩のコンパでのことだった。おれは仲のいい木元^{まさし}正史と山梨恒助の3人でツルンでた。なあ洋、免許って1か月で取れんだろ？今の講義つまんねえし、取っちゃおっかなあ、おれ。

山梨恒助 正史、今ごろ免許取るってか？大変だべよ。二十数万かがっし...

正史 そうだよなあ。バイトもしてねえし、面倒くせえな。

洋 なあ、とりあえず親に前借りしときゃいいじゃんよ。

恒助 それって永久に借りちゃうんだろ？

洋 もちろんよ。いいべえ。やっぱ親のスネはかじれる時にかじっとくもんなんだよ。なあ恒ちゃん。

恒助 おうよ。借りちまえよ、親に。

正史 んじゃ、そうしょっかな。おれだけまだ無免許だもんな。

ナレーション 自信を持って木元に前借りを勧めたおれは、何を隠そう、親からの前借り常習犯だった。返すつもりなんてさらさらない。いつだってそうだった。高校卒業の時の卒業旅行費だって、半年前買った中古のカーリーナEDだって、親に金出してもらっている。いいんだよ、ラクして金使えんだから。一人っ子のおれは、物質的には何不自由なく育った。そして、エリートコースをひた走ってるらしいおやじおと、おれを第二のおやじにするのが生きがいらしいおふくろが、ありがたくもおれのために敷いてくれた進学路線を曲がりなりにも歩いてきて、今はこの大学で大いに青春しようと思ってる。時々ふっと「これでいいのか。おれは何で生きてんだ?」と思うこともあるが、深くは考えないことにしてる。そんなのはおれの柄じゃない。

正史 ああ、でも、...やっぱおれ、バイトするわ。

恒助 どうしてよ。彼女が^{はら}孕んだんか？

正史 ううん。おれ、妹が2人いんだけどさ。2人とも、私立の学校通ってるから、やた

ら金がかかんだよ。

恒助　　そうか。えれえやつだよ、お前は。

洋　　なあ、同じ学科の清家ってやつ知ってるか？ そいつ、寸下えバイトマンなんだってうわさだぜ。

恒助　　ああ知ってる！ 確か3つか4つバイトやってんだろ？

正史　　げげげ、やりすぎ、それ。

洋　　ところがさ、そんだけ稼いで、別にハデに遊ぶでもなし、何に使ってっかさっぱり分かんねえんだってさ。まあ正史もバイトするんだったら、あいつぐらいするこつたな。平のサラリーマンの月収、軽く超すぜ。

恒助　　それよりよ。さっきからあの女たち、こっち見てねえか？

ナレーション　　そうって恒助が指を指す方角には、貴金属で身を飾った女の子が3人いた。

洋　　うん。でも何かケバすぎんぜ、あいつら。

正史　　いいよ、どんなんでも。(女の子たちに)ねえ！ こっちこっち。こっち来て一緒に飲もうよ！

ナレーション　　恒助の言ったとおり、この女どもはさっきからこっちを見ていたらしく、正史の軽い誘いにすぐ応じた。

赤石千恵　　いいのー？ あたしら、酒めっちゃ強いよ。

正史　　いいよいいよ。洋、もっと席詰めようぜ。

ナレーション　　おれの隣にも女が1人座ってきた。

千恵　　千恵でーす。よろしく。

洋　　おれ、洋。おめえ、もう酔ってんのか？

千恵　　酔ってないよ。あたしら、強いんだって。

ナレーション　　結局、おれたち3人のほうが先に気分が悪くなってしまった。

恒助　　うええ、気持ちわりい。

正史　　あ、おれ...、帰る。

洋　　おれも帰ろっと。

千恵　　じゃ、あたしも帰る。

ナレーション　　一体何時なんだか全然分からなかったが、ふらつく足取りで何とか家にたどり着き、自分の部屋に入ると、後はただベッドに倒れ込むだけだった。次の日の朝。

母　　洋！ 洋！ 起きなさい！

洋　　っだよ。うるせえなー、ババア。

母　　もう9時なのよ。いつまで寝てんの！

洋　　ナヌ？ げ、本当だあ！

ナレーション　　大学は電車で2時間のところにある。今から急いだって、午前の講義はまず出られないだろう。おれは今日一日遊んでしまうことにした。こういうときの決断は

極めて早い。

母 ちゃんと大学行くのよ。

洋 おう。ああ、飯代くれよ。

母 (ため息)昼食代ぐらい、自分でバイトして稼ぎなさい。

洋 あ、何で?

母 何でってあなた、遊びに行くお金は、母さん出してやってるじゃないの。

洋 いいじゃん。飯代も出してよ。どうせうち、生活苦しいわけでもねえだろ?

母 まあ、今のところはね。

洋 んじゃ、くれよ。

母 ったく。じゃあ今日だけね。

洋 今日だけえ?

母 今日中にどこかのアルバイト探してきなさい。

洋 ええ? めんどくせえよ。

母 じゃなきゃコンパのお金とかもう出さないからね。

洋 ったく、しょうがねえな。分かったよ。探してくるよ。

ナレーション おれは家を出ると駅に向かった。駅前通は買い物をしに来たおばさんたちでかなりにぎやかだった。

洋モノローグ こんなところでいいバイトなんかねえだろうよ。おお、女子高生だ。やっぱセーラー服はどんなやつが着てもいいもんだなあ。ふうん。あれ、あいつ...?

ナレーション それはゆうべ知り合った赤石知恵だった。

洋 ちえ!

千恵 あ、洋...君? ゆうべはどうも。

洋 なあんだ。お前、高校生だったんか。

千恵 そうなのだ。お嬢様学校の生徒なのだ。

洋 へえ。でも高校生が夜遊びなんかしてんじゃねえよ。

千恵 あたし、今、家帰ってないもん。

洋 え?

ナレーション 聞けば、千恵は2週間前、両親とケンカして家を飛び出したまま、1回も帰ってないらしい。友達の家で居候させてもらっているようだった。

洋 でも大変だろう、家出っただけ?

千恵 結構楽しいよ。友達みんな協力してくれるし。

洋 協力ねえ。

千恵 ね、ね、遊ば!

洋 いいのか、学校?

千恵 いいのか、大学?

洋 さあ行こうか!

ナレーション おれたちはお互いどこか似ているようだった。何て言うかよく分かんないが、同じエリアで生きている気がした。少なくともその時はそう思った。

千恵 ヘえー、じゃ洋君、カーリーナED乗ってんだ。自分のでしょ？ 金持ちー。

洋 親の金だけだな。前借りって形で、あとでちゃんと返すんだ。

洋モノローグ 我ながら、このウソも堂に入ったもんだ。

千恵 偉いなあ。しっかりしてるよ、洋君は。あたしなんて親の財布から金盗んでくるんだよ。

洋 (笑い) バイトすりゃいいのに。

千恵 バイトしてたけど、ちょっと前、やめちゃった。

ナレーション 夕方まで、2人でいろいろ巡り歩いた。おれは、この千恵って子が、見かけによらず心がきれいなものを知って、内心驚いていた。一見、人生をすねたようなひねくれた態度は、本来の彼女じゃない。そんな気がしてならなかった。

千恵 洋君、今日は楽しかった。ありがとう。いいバイト見つけてね。

洋 ああ。

千恵 お給料入ったら、ごちそうしてもらおうと。

洋 ちゃっかりしてんな、お前。

千恵 だってピーピーなんだもん、あたし。

洋 分かった。任しとけて。

ナレーション 彼女と別れて駅を降りたおれは、ちょうど駅前のコンビニのバイト募集が目に入ったので、申し出て採用してもらった。

洋 ただいま。

母 あら、お帰り。いつもより早いじゃない。

洋 おう。ああバイト、あれ、駅前のコンビニにした。

母 あらそう。いいんじゃない、近いし。

ナレーション 次の日からおれは、生まれて初めてのバイトを始めた。

南店長 じゃ、バイト時刻の10分前にはここに来てること。制服はいつも自分のロッカーに入れておいてね。カギはこれ、はい。

洋 あ、どうも。

店長 じゃ、次、レジの説明しようかな。こっち来て。

ナレーション 初めてで不安だったが、仕事が簡単なので本当によかった。楽な分、稼ぎやすいという理由で、おれは大学よりもバイトを優先する生活になっていった。親には毎日、大学に通っていることにした。そんなある日。

母 洋、最近大学のほう、どう？

洋 え？ ああ、いつもどおりだけど、何で？

母 隣の中村さんが、毎日あんたが朝から駅前のコンビニで働いてるって言うんだけど…。

洋 人違いだろ？ そんなわけないじゃんよ。
母 ならいいんだけどね。
ナレーション 一瞬、胸の辺りをどっ突かれた気がしたが、どうやら、おふくろはおれの言ったことを信用しているらしい。母親なんて、全く甘いもんだ。
母 あらあなた、お帰りなさい。
父 ただいま。
母 お疲れでしょ。おふろ先に入ったら？
父 ああ、その前に。あ、洋。
洋 ああ、何？
父 お前、大学休んでまでバイトはするな。
洋 ……。
母 え？ 本当、あなた？
父 ああ本当だ。よくおれが家に連れてくる部下の青山っているだろ、あいつが駅前コンビニで、洋が今日の朝働いてるの見たんだってよ。
母 まあ！ お前ったらウソついてたの？
洋 うっせえな。バイトしろしろ言うからしてやってんじゃねえかよ！
母 だれが大学休んでまでしなさいって言ったの？
洋 ああ、いちいちうるせえんだよ。説教すんじゃねえ。
千恵 (エコー) あたし、家帰ってないもん。
ナレーション 突然、耳の奥で、千恵の言ったあの言葉がよみがえった。
母 ちょっと！ 洋！ どこ行くの！
洋 こんな面白くねえ家、出てってやんだよ！
ナレーション おれはそう一言言い残して、家を飛び出した。自分でも驚いた。おれの中で、何だか知らないけど、長い間たまっていたらしいモヤモヤが、まるで漏れたガスに火花が散ったように、爆発したらしかった。とっさに持ってきたキャッシュカードを握り締めると、千恵の笑顔がふっと頭に浮かんだ。寒い夜だった。

<後編>

ナレーション おれの名は高橋洋。バイトのことで親と言い争いになり、勢いに任せて家を飛び出したものの、友人の木元のところも、山梨のところも、妹の受験やら何やらで、とても泊めてもらえる状況ではなかった。仕方なくおれは、もう夜も遅くなっていたが、バイト先に向かった。
洋 おはようございます。
南店長 あれ？ 高橋君、深夜のバイト取ってたっけ？
洋 いえ、でも今、働きたいんです。
店長 いいのかい？ でもちょうど人が足りなくなったとこだから、お願いしちゃおうか

な。

洋 はい。

ナレーション 時計は夜 11 時半を回っていた。店内にはまだ、立ち読みしている客が多かった。

洋 いらっしやいませ。

清家学 あ、すみません。トイレお借りしたいんですが。

ナレーション おれはそいつの顔を見て驚いた。”熱血勤労学生“で結構名の通っている清家学だった。その名のとおり、彼はバイト中らしく、警備員の服装をしていた。おれは、彼が稼ぎまくった金を何に使ってるのか知りたいという好奇心に駆られて、彼がトイレから出てくるのを待っていた。

清家 ありがとうございます。

洋 清家。

清家 え？ あ、君、あの...高橋君？

洋 へへへ。そう、高橋だよ。バイト？

清家 うん、警備のバイト。夜勤だから寒くて寒くて。

洋 大変だべー、外は。

清家 今日は特にね。あれ、高橋君で、ずっとここでバイトしてたの？

洋 ううん。最近始めたんだ。

清家 ふうん。

洋 ところでお前、何でそんなに働くんだ？

清家 え？ うん、話すと長くなるし、今バイト中なんで、今日は。またいつか。

洋 おお。頑張れよ。

ナレーション ヘルメットをかぶり、そそくさと自動ドアの向こうに消えてゆく彼を、おれは見つめた。そして、“あいつは、どう考えても、おれと違って自分のために金を使ってるんじゃないのは確かだ”と思った。

ゆっくりと時間は流れ、窓の外が次第に青みを帯びてきた。おれは猛烈な眠気に襲われた。

洋モノローグ (大あくび) 疲れた。

店長 お疲れさん。はい、眠気覚まし。

洋 あ、どうも。

ナレーション おれは、タイミングよく店長が入れてくれたホットコーヒーをすすりながら、これからのことを漠然と考えていた。

店長 どうしたんだい？ 何か悩み事でもありそうだけど。

洋 ええ。ちょっと家でごちゃごちゃがあったんで。

店長 最近、結構あるんだよね、そういうの。子供に言わせて見れば、親がウザったかったり、思い通りにさせてくんなかったり、いちいちうるさかったりってあるん

だろうけどね。でも自分が親になってみると、今までの自分のそういった態度が、親に対する甘えだったってことがよく分かるよ。

洋　　そういうもんですかね。

店長　　ちょっと前に辞めていったバイトの女の子がいてね。その子は家出てきちゃった子なんだけど、見かけよりしっかりしていたよ。

洋　　……。

店長　　家庭環境が最悪だったんだ、その子は。父親はいつも競馬パチンコで、家に帰るのは寝るときだけ。母親だって、いつもどっかの男とふらふらしている。こんな状態だったら、だれだって家出したくなるよなあ。寝泊まりは友達の家をさせてもらっているそうなんだけど、必死に稼いだバイト代はすべて、その友達のお母さんに渡していたそうだよ。”自分の分の食費代とかです”ってね。

洋　　そうですか。

ナレーション　　その時おれは、心の中で“千恵だ!”と叫んでいた。きっと店長は、彼女のことを言っているに違いない。

翌朝、大学に向かい電車の揺れる窓ガラスから、河川敷の景色を眺めていたおれは、キラキラと輝く川の流れに向かって、小さなため息を吐いた。

洋モノローグ　　あいつ、それで家出したのか。苦労してんだ。それなのに、バイトした金を友達の母親にきちんと渡してるなんて。千恵、お前って…。

ナレーション　　言葉にならなかった。なんだか無性に彼女がいとおしく思え、それに引き換え、自分自身がとんでもない甘ったれのように思えてきた。大学に着いても眠気はまだ収まらず、午前の講義はほとんど寝ている状態だった。午後の講義がすべて終わった時、おれの隣の席に、だれかがすっと座ってきた。

清家　　高橋君。

洋　　ん？ ああ、清家か。

清家　　ちょっといい？

洋　　ん？ ああ。

ナレーション　　清家は、談話室におれを誘った。

洋　　何だよ、話って？

清家　　うん。この間聞かれたこと、話す暇なかったから。

洋　　そうか。で、君、何でそんなにバイトするんだ？ 車でも買いたいんか？

清家　　いいや、車じゃない。

洋　　じゃあ何だ？

清家　　うち、兄弟 6 人なんだよ。父親いないし、母親一人で働いてても、すごく生活苦しくてさ。

洋　　ふうん。

清家　　大学通うこと自体、家族にとって重荷になるから、「じゃ自分の希望は自分で果

たそうかな」って思って、バイトを始めたわけ。でも今は、また別の目的があるんだ。

洋 別の目的？

清家 そう。んーとね

洋 じらすなよ。何だよ。

清家 東南アジアを巡り歩きたいんだ。

洋 東南アジアだ？

清家 うん。実はね、僕、クリスチャンなんだ。

洋 クリスチャンで、お前、あのクリスチャンか？

清家 うん。高2の時、洗礼を受けた。僕の通っている教会にね、バングラデシュに宣教師として行っている人がいるんだけど、この間帰った時、向こうの人たちの生活をいろいろ聞いて、すごくショックだった。

洋 ああ、その...やたら貧しいんだろ？

清家 うん。聞いても想像できない。僕は、自分の家の生活はかなり底辺だろうって思った。でもこうやって一生懸命働けば、親子 7 人、何とか食べていける。そう考えたら、とても貧しいなんて言えないって思えてきた。でも、何ともやりきれなかったのは、バングラや東南アジアの人たちを貧しくするのに、この日本が一役買ってるってことだった。

ナレーション おれは、半ばあきれ顔に、まじまじと清家の顔を見つめた。あの、金の亡者と思っていた彼が、クリスチャンだというのも驚きなら、その彼が、ほおを高潮させながら、東南アジアの話をするのも驚きだった。おれの思考回路からは、完ぺきに締め出されている世界の話だった。

清家 日本は、東南アジアの貴重な資源をどんどん切り崩して、現地の安い労働力でそれを加工したり、日本に持ち帰っては世界の富裕な国々に売りつけて、莫大な富を得ている。同じアジアの人々のかけがえのない富を盗んで、その犠牲の上にこんな豊かな生活をむさぼってるんだ。高橋君、ひどいと思わないか？

洋 う、うん。そう...かもな。

清家 デモね、その宣教師の先生は言うんだ。そんな極貧の中にあっても、そして仏教やヒンズーやイスラム教の厳しい戒律に縛られた社会の中にあっても、イエス・キリストの本当の福音を信じてクリスチャンになった人たちは違ってる。心の底から、喜びに顔が輝いてるって。僕はその話を聞いた時、“そうだ、僕もこの目で、東南アジアの人々を見てみたい”って思ったんだ。それで今、一生懸命お金ためてるわけ。

ナレーション これで、清家の猛烈アルバイトのナゾは解けた。おれにとっては、意外や意外、金田一耕助も想像できないようなナゾ解きだった。もう暗くなってしまった帰り道を歩きながら、おれは自分の家庭環境を、そして

おれ自身の生き方を考えた。確かにおれは裕福だ。現に今、おれのポケットには、1か月くらい十分過ごせるだけの自分名義のキャッシュカードが入っている。でも、これはおれの金であって、おれの金ではない。1円残らず親からせしめたものだ。おれは、心の中で親を軽べつし、憎みながら、その親に甘え、適当に親を利用しながら、自分勝手に生きている。外の世界を、そして生きることに傷つき闘っている人々のことを考えもせずに。

洋 やっぱ、これじゃいけねえ!

ナレーション 歩道から林の暗やみに向かって、思わずおれはそう叫んだ。その時だった。

天野牧師 もしかして...高橋君かな?

洋 は、はい。...そうだけど。

天野牧師 ああよかった。やっと見つけた。

洋 え? だれですか?

天野牧師 ああ、わたしはこの先にある教会の牧師で、天野という者です。

洋 確かにおれは高橋っていいますが、...何でおれの名前を知ってんですか?

天野牧師 君のお母さんがね、今日一日中、この通りを行ったり来たりしていたんだよ。不思議に思って声をかけたら、君のこと、いろいろ話してくれてね。お母さんは今、うちの教会で休んでもらってるよ。かなり疲れていたみたいだから。

洋モノローグ おふくろが、おれのことを...一日中捜していた?

ナレーション その時おれは、“自分のやったことは、間違っていたかもしれない”と思った。どうしてかと聞かれても説明できない。とにかく、瞬間的にそう思ったのだ。教会の会堂のわきにあった宿泊室に、おふくろは寝ていた。寒さで縮こまったその姿は、やけに弱々しく、小さく見えた。おれの心のどこかで、最後まで肩を張っていた何かが、音を立てて崩れ落ちた。

次の日曜日、おれは生まれて始めて教会の礼拝に出た。おふくろも一緒だった。親身におふくろの世話をし、おれの話をもじって聞いてくれた天野牧師の、出席への誘いを断りきれなかったのだ。

(効果音) (賛美歌)

千恵 洋君、おはよう。

ナレーション 驚いたことに、それは赤石千恵だった。

洋 千恵、どうしてお前...?

千恵 清家さんに誘われたの。あたし、家に戻ることにした。話せば長いから、礼拝のあとで。あ、ほら、清家さん。

ナレーション 驚きの二乗だ。講壇の上に、司会者として立っているのは、あの猛烈アルバイト青年の清家学だった。おれは、彼の話したあのバングラのクリスちゃんの話をも思い出していた。

洋モノローグ “喜びに輝いた顔”って、今のあいつのような顔かな。

ナレーション おれは、一人、心の中でそうつぶやいたのだった。

(完)